

小田原史談

第115号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

中野敬次郎 執筆

後北条氏秘話

(19)

北条文化小田原から

江戸に移る (下)

香川 政治 載録

(一)家康、小田原城外郭を破却

徳川家康の小田原城外郭破却の意図は早くからあって、秀吉の存命中すでに、その一部を実行しているのである。

「大久保家々譜」や「小田原盛衰記」の記事によると、文禄元年(一五九三)

小田原落城して北条氏が滅亡してから僅か三年目であるが、関八州を領してすでに江戸入りしていた家康はこの年七月、江戸城本丸の大普請を起し譜代大名にその課役を命じていた。

その時、大之保忠世は他の諸侯よりも倍の人数を参加させて、自ら炎天にさらされたが、日の暮れるまで

と思われる。

普請場で指揮を取っていたというので、家中の士も皆もつこを持って働いたのだ、他の諸侯は九月までかかったのに、小田原の大久保家の受け持ちのみは七月中に普請が完成したということである。

ところがこの時、家康の命で、小田原城外曲輪の石垣を崩して、その石を江戸表に輸送し城普請に用いることになった。家康の命を受けた小田原の石工青木善左衛門は、八州石工棟梁として関東一円の石工を小田原に集め、外郭の取り壊し作業を行ったと言われている。このことからしてもこの文禄元年の破却の規模は、相当のものであった

明早朝より小田原城外曲輪を破却せよ、との命令を小田原駐屯の全軍に下したのである。

この二十六日、二十七日の大破却は安藤次右衛門正次がその奉行となり、浅野妥女正長重、松平越中守定綱、西郷若狭守正貞などが助勢に加わって、江戸、駿府から集められていた軍勢によって敢行され、大騒動であった。

この時の有様がいろいろな書物に記録されているが「駿府記」には、「江戸、駿府の諸卒集りて石垣を崩し、大門を壊る。この騒動に依て、江戸駿府より小田原に馳せ集る輩勝計るべからず」

と述べ、また「東部談」には、「二十六日より江戸駿府の諸卒集りて石垣を崩し、大門を毀つ。故に所々騒動して、江戸駿府よと諸勢雲霞の如く馳せ集る」と記している。

この破却工作が並々の規模でなかつたことは、これらの記事によってもわかり単なる江戸城修築に小田原城の石垣を用いるためのものでなく、大きな政治工作であったことが察せられるのである。しかしともあれ、小田原城下の内外の市民は全く色を失い、右往左往して騒然たる有様であった。

戦国時代の城下町文化として、周防大内氏の山口文化と並び称せられた小田原の北条文化は、この天下無双の大外郭を持つ閉郭城に守られた小田原、市府城に守られた城下町の中に発展した文化であるので、大城壁をもぎ取られて、むき出しにされた城下町には、この種の文化はもとの形ではいられなくなつて崩壊するに至るのである。北条時代の城下町小田原の形がくずれ文化がここから去つて行くのは、天正十八年(一五九〇)の北条氏滅亡と、この慶長十九年の大外郭破却とが二回の大きな波であった。

当時徳川家康は関東入部以後、関東の経営の根拠地を小田原から江戸に移し、そこに全国首府としての大都市建設を目指した。豊臣秀吉が泉州堺の町人とその文化を移して、大坂の都市を建設した例にならつて家康も小田原の文化を江戸に移す計画をたてたのであった。

(三)小田原から江戸へ
小田原から江戸へ入つた文化の先駆は小田原の石工業者の持つ技術であった。戦国時代から江戸時代初期にかけては、全国いたるところに大小のいわゆる石

垣城が構築されたから、この城下町でも石工業は重要な存在で、北条時代の小田原にも関東の石切棟梁である石屋善左衛門一家を初め、多くの棟梁が工人を従えて仕事をしていた。

石屋善左衛門の家は元来甲州浪人、駿河国田中郷(御殿場市)に移つて田中氏を称して石工業に入ったという。北条早雲の小田原入りのとき、これに従つて小田原城下に移り石匠棟梁になつたが、北条氏が関八州を征覇すると善左衛門一家も関八州石匠棟梁となつていった。しかも北条氏の出陣のときは従軍して、国々に配下の石匠が多いことから隠密まで行つたというから、乱波という忍び者達の総支配をも勤めていたのではなかつたかと言われている。

く名を知られた家柄だっ
た。

恰も小田原北条氏が滅んで北条氏の旧領の関八州を徳川家康が領有して江戸に入ったところである。

家康が江戸に入って初めて江戸城の大改修に着手し
今の本丸、二ノ丸あたり
を築いたのがなお秀吉在世
中の文禄元年(一五九二)

であるが築城には石垣用の
石材を調達するのが第一で
あるので、家康は前記した
ようにこの時、すでに小田
原城の外曲輪に目をつけ、
その一部を壊して江戸城新
築の石垣に利用しており、
この工事担当者が石屋善左
エ門を初め小田原石匠達
であった。

慶長五年(一六〇〇)の
関ヶ原戦を経て、慶長八年
征夷大将軍となって江戸幕
府を開いた家康は、翌慶長
九年より新江戸城建設の大
計画に入って、全国大名に
命じて工事を助勢させるこ
とになる。この年の工事だ
けでも諸大名の手伝普請は
大名合計五百三十万石余、
石材五万九千三百六十箇で
これに毎年々々続けられ
て家康の没した元和二年(一六一六)まで休むことな
く行われたのであるから、
諸大名の負担は並々ならぬ
ものがあつた。しかし江戸
築城は家康没後も続けられ

三将軍家光の寛永六年か
ら寛永十三年(一六三六)
までの外郭大工事をもって
完成するまで、この間実に
四十五年間をかけたのであ
る。

この間、前述したように
慶長十九年(一六一四)
一月二十六日、二十七日の
両日には、家康、秀忠の前
現二将軍が自ら小田原に
来て、大外曲輪の大破壊を
実行し、その石材を江戸に
運んで新江戸城築造用に使
用しているのである。

この小田原大外郭破壊は
別として、家康より家光に
至る三代四十五年間の新江
戸城建設の石垣用石材は石
屋善左エ門家を中心とした
いわゆる小田原石匠と、
一部は近江の石匠として
知られた穴生衆に石垣御用
をつとめさせ、一部、全国
各大名から名石、大石など
が献上のために遠く海路を
輸送してくるものもあつた
が、大半は、小田原から根
府川、岩、真鶴、湯河原に
至る西湘海岸、次に伊豆半
島の諸海岸の石切場から切
り出したものを、石運搬用
の舟(舟にくり抜孔を作っ
て石を海中につるして運ぶ
ようになっていた特殊船)
で江戸まで海上を運んでく
るのである。

大名から遣された人足がこ
れに当るが、その人足達を
専門家の石匠が指導する
のである。特に御三家や西
国の外様の大名は専門の採
石場を持つことになってい
たので、今でも御三家並び
に蜂須賀阿波守、浅野出雲
守、黒田筑前守などの専門
採石場跡が岩村や真鶴に残
っている。

これらの石切、運搬の一
切を仕切るのだから、
石屋善左エ門を初め小田原
石匠衆の活躍はまことに目
覚しいものであつた。
当時の江戸城築造に活躍
した小田原石匠には本家
石屋善左エ門家の外に、別
家青木善三郎、五味伊兵衛
中野弥三郎などの名が当
時の文書の中に散見する。
さて、これらの石材は次
々と舟で江戸にはこぼれ、
築地に陸揚げされた。当時
今の中央区はまだ海でおつ
たのを、神田の丘を崩して
埋め立て、その埋立地の間
に運河を縦横に掘り、この
中を石材運搬船が通れるよ
うにしてあつた。その中央
の日本橋辺の埋立地を築地
と称し、ここが諸方から来
る石材の最大の陸揚げ地に
なっていたのである。
このようにして石屋善左
エ門家は石切とその運輸の
ことを司り、関八州の石匠
はもとより江戸城建設の最

盛期には関西諸国から江戸
に来ていた石匠をも支配し
た。以後小田原石匠棟梁衆
は各々江戸に住み、本家善
左エ門の家は日本橋と築地
とに宅地を与えられたが、
そのうち日本橋の宅地は方
一町という宏大なものであ
つた。
このようにして小田原石
匠達が、小田原から続々江
戸に移り住みそこに一つの
住宅街が発達したのでこれ
を小田原町と呼ぶようにな
るのである。
江戸時代には江戸に小田
原町と呼ぶところが二町あ
つた。元小田原町と南小田
原町である。
元小田原町は前記の小田
原石匠衆の住んだところで
後にその南方に小田原を
初め撰 諸州の漁業関係者
が集まって、一街をなすに
至つたので古くからある石
匠町を元小田原町といひ
漁業者の住んだところを
南小田原町と呼んで区別し
た。

南小田原町は、はじめ砂
浜であつて僅かの漁師が古
くから定住していた場所だ
つたが、寛文の頃相模小田
原の漁商達がこの地を幕府
に請うて開拓し、漁河岸を
開いた。
元来、北条時代小田原の
千島小路というところは、
船方村といつて、西隣地の
新宿村(古新宿)とともに
漁業地区として栄え、漁座
も発達し、魚市場もたち、
軍船さえも出したところで
あつた。ところが慶長年間
から江戸の開発が進むと、
多数の魚商がここから江戸
に移住し鮮魚を商つた。
南小田原の町名も寛文の
頃から起きたという。町の
北を肴店、南を稲荷前とい
ひ、町北の河岸を小田原河
岸と言つて、これが江戸魚
河岸の初めであつた。
明治二十七年(一八九四)東京
市の市区改正のとき、日本
橋区側の元小田原町と、京
橋区側の南小田原町を合併
して一町とし、新しく小田
原町として一丁目、二丁目
三丁目三区に分けた。こ
れが現在の東京都中央区小
田原町である。
石屋善左エ門の本家は、
後に江戸石工総棟梁の職を
辞して小田原に帰り、板橋
村に住んで現在まで石工業
は小田原退去を命ぜられ、
土分としてでは小田原に留
まることは許されなかつた
ので、殆どのは江戸を
初めとして四方に仕官と職
を求めて去つて行つた。
また、もう一面のことを
考えると、北条時代の小田
原は後の石高に直して約二
百八十万石の大名の城下町
であつたが、江戸期に入る
と僅かに大久保忠世の四万

五千石の小大名の城下町に
變つてしまつた。
当時の大名の家臣数は平
均一十万石に対して百五十
人(家)を保持する率であ
るから、二百八十万石大名
の城下町と四万五千石大名
の城下町では居住する士分
の數に格段の開きがある。
非生産者(需要者)階級で
ある士分が激減した小田原
には、生産者(供給者)階
級である多数の商工業者は
到底いらぬ。そこで必然
的に小田原から商工業者が
移動して行く。恰も新興江
戸の抬頭と発展とは彼等が
移つて行く格好の土地であ
つた。
北条時代、小田原城下町
の人口は数万人と推定され
るが、大久保家の初期の人口は僅かに一萬五千人に満
たない。
北条文化はそっくり江戸
へ移つて行つたのである。
鶴江戸に多い小田原関係の
地名

江戸時代には江戸市中にあ
つた二つの小田原町、元小
田原町(日本橋)と南小田
原町(京橋)については前
回で詳しく述べたが、この
外にも相模小田原と関係深
い地名とその起源を持って
いるところが、江戸には多
い。
江戸城(千代田城)にも
今の宮城の正面御苑より南

へ、霞ヶ関虎ノ門に通ずる門戸を小田原口と言って、そこにある門を古くは小田原門と称した。現在の桜田門である。

万延元年(一八六〇)三月三日の節句に、井伊大老が風雪の中をこの門から登城しようとして、水戸と薩摩の浪士隊に襲われて非業の最後を遂げたところでもある。

ここが古くは小田原門と称したことは、慶長時代の江戸古図面に「小田原御門」と註記され、「落穂集」にもその元の姿を記して、「今、外桜田御門の立候所には、大きな扉なき木戸門立て有之、名を小田原御門と申し候」と述べている。

桜田門が古名小田原門、小田原口と呼ばれたのは、この門を南に出て、東海道を経て江戸の西衝小田原城に通ずる要門であるからだという説と、慶長頃、江戸城構築のとき小田原の石工衆によって最初に築かれた城口であったからだという説があり、また小田原城外郭の石材を運んで作った城門であったからだ、とも伝えて定説がないが、関東大震災直後にこの石垣修理に呼び出されて参加した経

屋たちが、異口同音に私に語ったのは、桜田門附近の石材はたいして真鶴方面の小松石で、その石切場跡や今に残された石材に彫られたのと同じの符号が石垣の石にもついていたというところであった。

さて、また江戸にはもう一つ小田原町というのがあった。それは神田三河町の古名で、初め新小田原町といっただのである。寛永江戸図には新小田原町と記され、また「正保日記」には「神田橋の外へ渡御(將軍)、鎌倉河岸に鴨群居したり。礫を打ち追立てよとの上意なり。新小田原町の店に置きたる蛤を取て礫に打ち、鴨を追立、御拳にて鴨を合せ給い御機嫌快然云」という面白い記事がある

これらの文書によって、江戸開府の頃から少なくとも十七世紀後半までは、神田の中央に新小田原町という町があったことが知られるが、言うまでもなく相州小田原の商人衆が移住して町を作ったというところで、日本橋の元小田原町、京橋の南小田原町に対し、これらに次いで小田原から来住した人々で作られた町であったから新小田原町と称したのである。後に三河町と

かわり新小田原町の名は消えたが、これは家康入府の頃から家康の出身地の三河国から連れてきた小祿の武士をこの一部に住まわせたので、それが後に地名となったのである。

元来、神田地区は神田山という名の丘陵だったところで、江戸開府とともにこれを崩して、その土をもって日本橋、京橋地区の前面を埋め立てた。この結果、神田山は平たい台地となった格好の市街化用地になったから各地から商人が集合して、江戸の一大商業区となったのである。

戦国時代北条氏の頃、小田原が東日本第一の城下町として毀賑を極めた有様を「小田原記」は「去る程に相州小田原守護の政道私なく民を撫でしかば、近国他国の人民恵に懐き家を移し、津々浦々の町人職人西国北国より群り来る。昔の鎌倉もいかに是程ならんやと覚ゆる計りに見えける。東は一色より西は板橋に至るまで、其の間一里の棚を張り売買数も盡しける。山海の珍物、琴、碁、書画の細工に至るまで尽さずという事なし。異国の唐物未だ目に見ず、まして聞も及ばざる器物の幾等という事なく積み置きたり交易売買の利潤は京、堺

の辻にも過ぎたり。民の籠も豊饒にして東西の業繁昌せり」と記しているが、それ程に繁昌した小田原の商工業が、挙げて江戸に移って行くのは、慶長から寛文に至る約五十年、十七世紀の前半期のことと、特に小田原商業は江戸神田地区に参集していったのである。

江戸期前半の江戸商業の中心であった神田地区でも最も早く開かれた町に神田鎌倉町がある。こは、後北条時代関東第一の豪商と言われた鎌倉屋四郎右エ門の一家が、小田原城下の宮ノ前町から、小田原落城後まもなく、徳川家康の招きに依じて、一族一党の商人を引きつれて江戸神田に移り、各々の商戸を構えたところから、鎌倉町と呼ぶようになったのである。

この近接の三河町が、初め新小田原町と言ったことを前述したが、恐らく小田原から移り住んだ商人団が鎌倉町のそばに集団をなして商戸を構えたことから町名が起きたのだろうと思う。神田には相州小田原と関係の深い皆川町というところもある。

小田原北条氏の被官皆川山城守広照という人物の名から町名がついたのである。広照は籠城中に小田原城

を脱出して、豊臣方に降服した問題の人物で、後に徳川家康に仕え、神田の地に屋敷を与えられた。それが後に町名になったので、こは初め武家屋敷地帯であり、商業地になったのは享保の頃、十八世紀の前半と言われている。広照がここに住んだとき幾ばくかの小田原商人を連れて行ったのであろうか。

また、京橋にある釜屋堀という地名は小田原城下の古新宿町(当時は新宿町)須藤町(今の小田原銀座)などに住んでいた鍛冶職、鋳物師達が、小田原落城後に江戸に移り住んだ場所として、小田原文化の江戸移遷の記念すべき地である。

北条時代小田原の鉄工業は有力な業者が関東、東海業地帯を作り、その毀賑は勿論、東日本無双のものであった。

って、小田原天命釜を出したのには有名である。江戸の釜屋堀は、この小田原鋳鉄の鋳物師集団の移動地であって、江戸初期の鉄工業が、京橋を起点として興きたのはここに起因するのであるという。釜屋堀周辺には今も小田原から来住した家の子孫が住んでいる。

とにかく江戸の町名、地名には相州小田原と関係の深いものが多く、中には故意に小田原に附会されたものまである。例えば日本橋地区の万町(よろづちよう)、青物町は小田原の同町名の住人が移り住んだ町という説がある。それは両町の東方に海運橋(海賊橋)という橋があり、小田原北条家の海賊大将(海軍司令官)高橋将監が、北条氏滅亡後に家康に招かれて仕え住んだ屋敷の側にあった橋なので、初め海賊橋と言ったが、「賊」の称を忌んで海運橋と改められた由緒がある。そのことからその万町も青物町も、小田原から来た人たちの町という俗説が生まれたのであろう。

「大日本地名辞典」に著者吉田東伍博士は「一書に四日市、青物町、万町は徳川公入国の初め相州小田原城下の商人来り、故郷の町名を移したるものと述ぶ。是

れ疑うべし。そもそも四日市、青物町、万町というごとき町名は、市邑の成立にあたり何地にも必然に起こるべき普通の現象にして特

別にこれを他邑より移すといふは殆んど其の義理なし」と述べておられるが、もつとものことと思われる。

陣が道という名の古戦場

星野 幸一

昭和四十六年七月十二日小田原市役所より一通の封書が舞いこんできた。それは井細田の住居表示が十月一日より「扇町」に変更するという内容の通知書であった。

町名を口にする気にはなれなかつたものである。ところが最近私は井細田で産声をあげた戦後世代の人たちが後述する陣が道という地名を知らないことに驚いたのである。寧ろ私の方が使用されなくなった過去の地名であることを教えられたという感じとなつてしまつた。

新町名は井細田にまつわる風土の事例からいくつかの地名が候補にあげられ、時間をかけたアンケート調査をもとに地域住民の意志が集約されたものを審議して決められたのであるが、井細田の歴史からみると管

生活環境が合理化されて住居表示の記号化が進んでくると、土地についた名である地名としての感情や情緒までが稀薄となつて過去を知る手がかりも消え失せてしまふのだから。

当初馴染めなかつた「扇町」も今ではさり気なく言えるようになってきた。井細田という地名で生れ育つた世代にとっては旧名への愛着は捨てず素直に新

陣が道と云えば井細田の南部に位置する旧道が屈曲した約五十米に跨る地帯の通称である。名前から受けるイメージと云い、祖父(慶応元年生れ七十四才にて歿)から聞いた昔話に陣が道を掘れば武士の骨が出て

くると言つた言伝えから少年時代にはサムライのお化けが出てきそうなウス気味悪い幻想に駆られたものである。人骨が何十体、何百体に及ぶか計り知れないが丹沢の山なみ遙か雄大な箱根連山を背につわもの共が展開した激戦の跡も今その名残りをとどめるものはない。

道路を曲げて造つたのは敵の奇襲を防ぐ目的であつたという説もあり戦術上造られたものと考察され、地名の由来はここからきたとも云われている。

当時の井細田村は甲州街道の出発点、井細田口として城下町へ出入する虎口で軍事、交通の要衝であつた寺院が集中する寺町を、バツクに小田原防衛の戦術拠点となつた北の里、南横、丸島

陣が道、瀬戸河原(改修前の久野川沿い地域で井細田村の字名)には防禦ラインが設定されたことだろう。北条早雲以来小田原が戦場となつたのは秀吉の小田

原攻めをおいて他には考えられず、この戦いは日本の戦史に残る大戦略戦であり陣が道はその前哨戦の舞台となつたところである。この

の攻防は北条側からすれば防禦であり豊臣側からみれば陣地攻撃である。北条側はこの戦いを天正十五年(一五八七年)には予測し農

民の労役動員をかけ小田原城の大修理と早川口―板橋―箱根山麓―谷津―山王川―新宿を結ぶ十軒の外郭に高さ四米乃至六米の大土塁や敵堀を構築したのである

鉄砲の製造も開始し前衛線となる山中(函南)・葦山の二城をはじめ箱根山の諸城を修理して防禦の態勢を整えていった。しかし兵力

は総勢約三万四千、質的には民兵クラスで装備も古く訓練された正規軍といえるものではなかつたという。

之に対する豊臣側は徳川家康を先頭にそれぞれ数人の大名軍からなる三軍を合

せると三十万を数えたとも云われ質的には兵農分離に

つて編成された専門的な戦士団であつた。秀吉は天正十八年(一五九〇年)三月一日十五万の大軍を率いて京都を出発、

四月五日には箱根湯本に進出して早雲寺を占拠、その附近を本陣として石垣山に一夜城を築いたのである。四月四日には陸上より十一

数を知る術は無いが兵員数からみても大船団であり相模湾を覆つてしまつたこと

だろう。同日、夜襲による初攻撃が行われ、七日には第二次

攻撃を敢行したが堡壘堅固にして突入は成らず九日には葦山城攻撃中の部隊より

二万五千を増援させて第二次の包囲を完了したのである

。増援兵力より推定すれば豊臣軍は可也の死傷者を出したことだろう。難攻不落とみた秀吉は味方の犠牲

を払う無理な攻撃をさけ得意の兵糧攻めで包囲持久戦に切り替えた。

城中の作戦会議では北条氏直の腹心等の和戦両論がまともならず武蔵(埼玉)の鉢形城主北条氏邦は駿河(静岡)に出で秀吉軍を

迎撃討つ策をと、重臣松田憲秀は伝統的な籠城作戦を主張して譲らず評定は

長びき、後に談合が長びいて決らないことを「小田原評定」というようになったのである。

結局は城にこもりかたく守れば敵は補給に困つて退散するであろうとの判断から籠城作戦に決つたが秀吉

の持久戦に対応する凡ての手は打たれてた。駿河の清水港には二十万石の米を集結し黄金一万枚で東海地方の諸国から粟を買い上げ

何と米五、六十万石に相当する数量であつたという。輸送には配下の水軍のほか伊勢の大湊から優秀な廻船

三百隻が動員され長陣を覚悟の秀吉は将兵の退屈を防止

戦意をたかめるため陣中には遊女も軒をならべたといふ。そして小田原城を孤立させ城内の動揺を待たしたのである。政治工作による内部分

兵を対峙したのである。

北条方は井細田の久野川
湾曲点イッチョの竹藪には
伏兵を配し丸島祠附近を待
大将の本陣として陣が道に
布陣した。久野川の線で徳
川軍を阻止しようとするれば
西軍入れ乱れての激戦であ
る。西の鈴木家ではその時
兵火にかけられたと伝えて
いる。徳川軍は陣が道を落
して小田原城へ進撃したろ
うが、作戦は兵糧攻めに変
更され長期にわたる駐屯と
なったので井細田周辺の村
々は想像を越える大混乱と
なつたろう。

秀吉が陣中から京都聚楽
第にいた北政所(ねね)に
あてた手紙(京都・高台寺
所蔵)にはおおよそ次のよ
うなことが書かれている。

(中略)

たびたび人をつかわされ
(手紙をもらい)嬉しく存
じている。小田原城まで二
十三町のところに包囲網を
しき堀・塀も二重に築いて
敵は一兵たりとも逃さぬ所
存である。

(中略)

若君が恋しくてならぬが
将来のため、また天下統一
のためと思っているから恋
しいことも断念して心安ら
かにしている。

われらは灸まですえて身
の養生に努めているので気
遣いは無用である。

(中略)

たとえわれらが当地で越
年することにならうとも年
内に一度はそちらに参り大
政所、それに若君にもお目
にかかる所存ゆえ御安心な
ざるがよい。

この書簡からも歴史を超
えて鮮やかに長陣に対する
武將の決意が伝わってくる
のである。

扱て、小田原城まで二十
三町のところにしした包圍
網、二重に築いた堀と塀と
はどの附近に当ることだろ
う。陣が道は果して堀や塀
の内側か外側の何れに位置
したことだろう。二十三町
の距離も含めて戦術上一つ
の謎として考えられるので
ある。

当時の附近の地勢、攻防
両軍の兵力比、何時どの方
向から攻めてきたか、敵味
方の死傷者数等の真実を知
る史証もなく推理的となつ
てしまったが力の限り抵抗
し、ここに血を流して敗れ
た北条武士たちの歎に陽の
当ることはあるまい。

四百年の歳月が流れた今
陣が道は歴史の残像もなく
記号化された住居表示の中
に埋没して私たちが子供の
頃から呼んでいた地名は忘
却され戦場の底辺に残され
た伝承は時空の彼方に消え
去るときがきたようである

(丁)

附記

秀吉の小田原攻めは天
正十八年の春。当時の井
細田村に森はなく附近一
帯は田圃か草原であつた
ろう。因みに八幡社が祀
られたのは翌十九年。小
田原攻めで荒廃した領内

古鏡考

大井 諦玄

の復興過程で神社が祀ら
れたのである。
四百年の歴史を秘めた
神社の森は現在小田原市
の保存樹林に指定されて
いる。
昭和五十六年四月

壽昌寺は小田原市荻窪五
四六番地に所在し山号は庵
谷山といい、本尊は行基菩
薩の作といわれ立像十一面
観世音菩薩でその前に古鏡
が祭られてある。それは表
は鏡で裏は松竹梅に鶴五羽
亀一匹に菩提樹が画かれ鉄
の鑄物で直徑二十釐で藤原
英政の銘がある。

古鏡は明鏡ともいわれ道
元禪師(一一〇〇〜一二五
三)著なる正法眼蔵の坐禪
箴に「古鏡も明鏡も磨導よ
り作鏡をうるなる」とある
より昔往は鏡は瓦から作ら
れたものと思われる。

正法眼蔵(九十五卷)第
十九卷に就いて、仁治二年
(一一二四)九月九日観音
道利興聖宝林寺(曹洞宗山
号仏徳山・京都府宇治市宇
治山田町所在)に於いて修
業僧に示されて居ります。

その開巻第一に
「諸仏諸祖の受持し単伝

の現象の千変万化の相(す
がた)となつて現れている
すべての時において実現
している。古が実現し、現
在が実現し、仏が実現し、
祖師が実現する。

印度の釈迦牟尼仏大和尚
から十八代目の伽耶舎多
和尚(筆者は七十五代目に
当る)は印度の西或のママ
イ国の人で、父は天蓋母は
方聖と云つた。

母がある時神様が鏡を持
つて迎へに来た夢を見てそ
れから懐胎して伽耶舎多を
生んだ。伽耶舎多は生れた
ばかりであつたのにその肌
は磨いた瑠璃(寶石の名)
の様で清潔であつた。幼い
頃から閑静を好んだ。こと
ばは世の常人とは異り、生
れた時から一つの清らかな
円鑑と一緒であつた。円鑑
とは円鏡である。円鏡は母
体から生れたのでなく伽耶
舎多が母から生れた時から
円鏡が自然に前に裝飾の道
具の様に現れた。

この円鏡の有様は童子が
こちらへ来るときは円鏡を
両手で捧げている様に見え
た。然し童子の顔は隠れな
かつた。童子が行くときは
円鏡を背に負つて行くよう
であつた。然し童子の体は
隠れなかつた。寝ていると
きは円鏡がその上をおおつ
た。丁度華飾をつけた天蓋
の様であつた。昔の賢人聖

者。諸仏諸祖の言動を見よ
うとすれば古鏡に映る。経
典によつてその経義を見る
よりも古鏡によつて見る方
が明かであつた。
要するに古鏡は仏々諸祖
の護持している本の自己の
意で仏祖を象徴している。
軒轅黄帝膝行進崆峒
問道乎広成子。干時広
成子曰。鏡。見陰陽。本。治
身長久。自有三鏡云。
天。云。地。云。人。此鏡無
視無眩。抱神以静。形
得自正。必静。必清。
無勞。汝形。無揺。汝
精。乃可以長生。
黄帝(姓は軒轅)は崆峒
山と云う山で仙人の広成子
の前にひざまづいて、身を
治めることを尋ねた。広成
子は云うた。

「鏡は天地陰陽の根本であ
る。身を治めるために天。
地。人。と云う三個の鏡が
ある。この鏡は見ることも
出来ず、聴くことも出来ず
もし、心を静かに治めて
おれば、身は自ら正しくな
り、心を静かに清らかにす
るならば、身を煩わすこと
がなく、心を散乱し動転す
ることがない。このことが
長生する秘訣である。」と。
中国でも三種の鏡を以つ

て天下を治める大道とした日本でも神代から三種の鏡があつて剣と共に伝来して、今日に至つて居る。一個は伊勢神宮に、一個は紀伊の国の日前社に、一個は内侍所にある。これによつて見ると国家は鏡を伝え持っていることが明らかである。鏡の所持者が国の権利者である。

お薬師さん

本場 大就

当寺は、臨済宗健長寺派盤谷山法輪寺と称す。延文三年（一三五八）の春、紀州の大守島山源国清曾我城に在るとき、当時の建長寺第三十五世了堂素安（勅諡本覚禪師）和尚の徳を景仰して弟子の礼をとり、曾我城西に法輪寺を建立す。（けだし孟州濟源県の地に類すればなり）了堂和尚を請して開山祖となす。爾來法灯伝承して今日に至る。（現住瑞雲大龍は当山二十五代なり）

初に「古鏡は磨琢より作鏡を得る」と坐禪箴に述べた。鏡を得るに如何なる人でも克苦精進すれば、理想の人間、つまり仏になる。即ち生死即涅槃、古鏡は仏祖の象徴であると再言して筆を置きます。

共に復興しましたが、薬師堂は雨露を凌ぐ程度の応急処置しか出来なかつた実情でした。小納は昭和七年当寺副住職を拜命しましたので、先住の意志を継承し、何んとか復元したいと思いつつも、荏苒日を過してしまいました。

様は、その名のとおり、病をなおして下さる仏さまとてきました。本名は、東方薬師琉璃光如来。如来が仏さまになられる前、菩薩として修行しているとき、十二の願をたてた。光かがやく自分と同じように、みんな仏さまにさせよう。欲望や迷いの中にさまよっている者の目を開かせて、どんな事でも思いのままに出来るようにさせ、心を安らかにさせよう。悪いことはやめさせ、人々のためになる善い行いをさせ、食べ物や衣服を充分に与え、苦しみを除き身心を安楽させてやろう。顔がみにくかったり五体が満足でない者などみな立派な身体にして、その苦しみを除く。薬師の名号を一度でも聞けば、病はなおし、身も心も安らかに豊かな生活が出来るように、十二の願を叶えて下さる身近な仏さまです。京都比叡山延暦寺の根本中堂のご本尊も薬師如来です。印相はお釈迦様とおなじ「施無畏・与願印」をしています。左手に薬壺を持っておられるのが薬師様の特徴です。十二神将は、薬師如来に属し、仏教の行者を守護する十二の夜叉大将、諸仏の化身とし、また刻を守る神とされています。

民館の在る処にあり、明治の後期か大正の初期に、法輪寺境内に移築されたものと聞いています。もとく神宮寺は法輪寺の末寺であつたので、元和二年の建長寺記録によると、法輪寺の末寺として次の三寺が掲載されています。

小沢山神宮寺 曾我谷津村 助信山泉宗寺 右 同 中華山心福寺 曾我別所村 大正十二年九月一日十二時直前に突如関東地方を襲つた大震災に、薬師如来、脇仏の日光、月光両菩薩、十二神将、合計十五体の仏像寺が、損傷甚しく、勿論御堂も例外ではなく破損しました。地盤が良かったのか本堂、庫裡は比較的被害少なく、昭和四年春、山門と

私像の復元費は住職の私財で支弁する故に、薬師堂の改築費は檀信徒の皆様にお願ひしました。小納は大本山建長寺に宗務総長として在任中のため、本山と自坊を往来しつつ、副住職、檀徒総代、建設委員等の協力により、予定通り事は運びました。

昭和五十六年四月十二日午前十時より、薬師堂落慶法要を営弁。当日大本山建長寺より法務部長雪文哲師来山、門中院正副住職十数人、檀信徒百二十人参会桜花爛漫の下、住職導師となりて壯厳盛大裡は無魔円成いたしました。

「オンコロコ、センダリ、マトギ、ソワカ」は薬師さんの真言です。お薬師

第四回 市内仏像仏画

見学めぐり

香川 政治

日時 昭和五十五年九月二日
九日
参加者 四十八名 バス一台
巡路 藤棚前出発 板橋香林寺 量覚院（秋葉山） 正恩寺（幸町） 円福寺（幸町） 徳常院（幸町） 中食 宝安寺（万年町） 新光明寺（扇町） 大聖院（扇町） 駅前解散

前日まで梅雨時のような不順の雨模様の日であったが、この日は前日までとは打って変わり初秋の秋晴れ、好天に恵まれ絶好の見学日和であった。午前八時三十分定刻に藤棚前を出発前記のコースを中野会長の案内で巡視見学終日みのある一日を過ごし午後五時小田原駅前にて解散した。

今回の催しにつき各寺院の我々史談会に対し絶大な御好意と御協力を賜わりただただ感謝の一語につきる。

我々二度と再び拝観することの出来ぬ貴重な寺宝を特別に拝観することが出来る特に宗福院の本寺香林寺で宝袈裟二頂と宗福院（地藏

堂の御本尊である体内の腹籠り地藏尊拝観。この腹籠り地藏尊については御住職のお話では、毎年正月、八月の二十三、四日大祭の都度二十三日朝香林寺に安置されている御本尊（腹籠地藏尊）を地藏堂に常時安置されている身丈八尺の大坐像の腹中にお移して廿四日の夕景お祭りが終ると再び体内より取り出し香林寺の方に安置しておくとのことである。また五百有余年も全過している袈裟二頂一見したところでは何の損傷も見当たらない程しつかりしているのには驚かされた。その他数々貴重な寺宝を拝観一同感無量後髪を引かせる思を残しながら香林寺を後に次々秋葉山量覚院を訪れ、鈴羯羅童子、制多迦童子を拝観後市内に引き返し幸町の正恩寺を訪れたが折悪しく御家族のどなたか御不快の由承り拝観を御辞退したが、親鸞上人、蓮如上人御直筆のお軸を拝見出来なかつたことが心残りであったが又の機会に拝見させて戴くことにして、すぐ隣り合

せのような処にある円福寺にて白磁観音像を拝観後、近くの徳常院に徒歩にて訪れ銅製坐像延命地藏尊を拝観、中野先生のこの地藏尊の由来について縷々説明を聞く。

この延命地藏尊について中野先生の著書小田原近代百年史に詳細に記されてある。

徳常院にて一応午前中の予定は終り駅前まで来て一時解散自由行動にて各自思い思いの中食を済ませ午後一時三十分再び車上の人となり万年町の宝安寺を訪れ聖徳太子の坐像拝観御住職の縁起その他の講話を三十分程拝聴。次は蓮上院の予定であったが蓮上院の金銅観音像はお開帳の年が定められてある為(来年が当り年との事)お断りあり止むを得ず次の扇町の新光明寺を訪れ本堂にて地藏菩薩像を拝観。

弁財天像について中野會長の縁起等を聞く、拝観を終り当寺に眠る日本最後の仇討で有名な小田原藩士浅田兄弟の弟浅田紋次郎の墓に詣で、近くの大聖院の荒沢不動尊を拝観御住職のユニフォームをまじえての縁起その他いろいろとお話を承ま

る。大聖院を最後に本日の予定を終り駅前にて午後五時解散。今回の仏像見学は前述したように訪問先の各寺院でのご協力下され大切な寺宝を我々一行に拝観させて戴き終り驚喜の連続で非常に意義ある一日であったことと

賜はることを希望して各寺院の縁起を記して見よう。

○宗福院(板橋地藏堂) 地藏堂は正しくは金龍山宗福院と称し、本寺南谷山香林寺が主管しており、御本尊は弘法大師作延命子育地藏大菩薩で身丈八尺の大坐像の腹中に鎮座してある

故に腹籠(はらごもり)のお地藏さんと呼ばれている慶長三年(一五九八)創建す。開山理吟文察、香林寺第九世。

由来(寺の縁起書による) 凡そ一〇〇〇年の昔弘法大師が北国に向う途中、箱根大地獄谷一ノ瀬で一夜を過ごされたとき、冠ヶ岳から地獄の苦しみを思はせる叫喚が夜毎に聞え、村人も旅人も困りはてている話を聞き

一、現世の災難を除き、最上の福を得せしめんことを 二、死後の衆生を導き、安楽浄土に生ぜしめんことを という二大誓願をたて「お地藏さま」のお姿を刻み、ご回向申しあげたとこ

ろ、冠ヶ岳の叫喚一時に止み、箱根越えの往来も賑わい、村人の生活も豊かさを増してきたといわれる。村人はこの「お地藏さま」を箱根湯本宿の古堂に祀って祈りを続けてきたが、永禄十二年(一五六九)香林寺の第九世理吟文察大和尚が、弘法大師の二大誓願を西湘一円に広めようと発願し、現在地に身丈十尺の大坐像を作り、その懐中に真体を遷座安置した。この地藏堂は、元禄二年(一六八九)と明治八年(一八七五)に災火を受けたが、真体は二度とも災禍をまぬがれ、現在身丈八尺の大坐像の中に鎮座している。

板橋の地藏尊は弘法大師ご彫像の因縁が尊ばれ、小田原宿を出た旅人は箱根越えの無難を祈り、また無事に箱根を越えた旅人はお礼参りに参詣し、東海道五十

三次の一大霊場として賑わい、特に毎年正月、八月の二十三、二十四日の両日に行われる大祭には西湘一円から祈願や供養のための参詣者が集り大変な賑わいを見せている。

○香林寺「相模風土記稿より」 香林寺南谷山と号す。曹洞宗(早川村海蔵寺末)慶安二年(一六四九)領主稲葉美濃守正則、境内二十三

石二斗五升三合の除地を寄附す。本尊薬師は行基作長二尺五寸五分、昔村内字南谷にありしを、文明十六年(一四八四)本尊とすと云開山大樹乘慶、開基は北条左京大夫氏綱の室なり(法謚養珠院春花宗栄大禅定尼天文七年(一五三八)三月一日卒、当寺に葬と伝れど今葬地詳ならず)かかる由緒を以て古は当寺及海蔵寺久野総世寺を小田原三寺と唱へ西郡一派を支配せしと云う。

寺宝 袈裟二頂 一は本寺(海蔵寺)開山安叟楞より伝来す。竹布の製なり。 一は紹陽和尚の伝衣なりと云う、芭蕉布にて造る。 笈一個 開山全国行脚の際用いられたものと云えられて

○量覚寺(秋葉山)(板橋) 大徳山秋葉寺と号す。縁起によれば天正十八年(一五九〇)八月大久保忠世遠州二俣城主から小田原城主封ぜられたが大久保氏は代々遠州秋葉山三尺坊権現を信じておったので小田原城主となつた後慶長元年(一五九六)当所に勧請したと云えらる。

○正恩寺(浄土宗)(幸町)「相模風土記」 法性山妙賢院と号す。寺伝に平重好入道了順(平重成の臣)尾州海東郡富田庄に起立す。その孫長願の時本山澄如に謁し師弟の約をなし、法名、順誓、寺号を正恩と賜う。順誓の子専信事縁により三州額田郡土呂に移住す。信子なきにより本山教如の命により三州針崎勝曼寺の次子信賢を義子となし住職を襲ぐ。時に大久保相模守忠隣宗妙賢院、信賢を帰依し、天正十八年(一五九〇)小田原に招き城内に住ましむ。文禄二年(一五九三)三州の寺を当所に移し殿堂を建立して菩提寺となす。妙賢院を中興の開基とす。

本尊弥陀は妙賢院の看經仏であり妙賢院歿後寄附された。 寺宝 九字名号一幅(親鸞上人筆) 正信偈文各四句二幅(蓮如上人筆) ○円福寺(古義真言宗)幸町 医王山薬師院と号す。元龜二年(一五七二)青物町に起立し承応元年(一六五二)此の地に転ず、開山有山、本尊不動(長一尺一寸寛鑊作)安置。

○徳常院(曹洞宗)幸町 龍珠山と号す。開山至明宗順(元和四年(二六八)八月廿四日卒)本尊三尊弥陀及虚空蔵(銅仏長六寸七分弘法作)、延命地藏尊(銅製座像八尺)安置され、毎年七月十六日の夜、海浜にて施餓鬼を修業す。 徳常院の延命地藏菩薩の縁起及由来 当山奉安の延命地藏大菩薩は正徳三年(一七一三)増上寺塔頭常照院内願主心常常念の発願により武州江戸神田鍋町鋳物師太田駿河守正義これを鑄造して、箱根権現の別当金剛院内賽ノ河原に安置し奉ったもので十万の善男善女の参拝者群をなしたと伝えられているしかるに明治の当初廢仏毀釈の論、盛にして終に神仏分離の達令となり、故に丈六の地藏大菩薩も江戸の古物商に売却されて、小田原千度小路海岸まで運ばれ、これより海路江戸に送ろうとした処、連日大時化となり沖天の激浪打ち続き、人々仏罰を惧れ安き心もなく戦々々々としていた。折柄一夜運搬人の枕頭に地藏菩薩が現われ「この所、予が仏縁の地なり、永劫動くべからず、若し意に背かは守護神許すべからず」との靈夢に一同恐懼措くところを知らない。斯くして当寺の当院檀信徒の有志等発願してこの仏縁の地藏常院に奉安せらるることになった

のである。

この尊像はかつてその堂宇を存したのであるが、津波にて破損し爾来五十年霊座にいませしに、関東大震災には炎々たる猛火に包まれ給いしも何等の変わりもなく又近くに銅回収の厄にあいしも妙力通じて忽ちその難を免れ、現に堂々として慈眼もて衆生に接し給う口碑には八百屋お七の供養仏であると云われているが菩薩は蓮華台坐に半跏趺坐にいまして、実に高さ八尺胸巾五尺而も青銅の尊像であり因に蓮華台坐には寄進者の名が無数に刻まれ菩薩との因縁を表わしている。

此の尊像は延命地藏尊と呼ばれるような今日まで寿命長遠国土のあらん限り永劫に西洲の名勝地として、黒潮煙る千度小路海辺の徳常院境内に安置せられ、正徳年間の名作として重要な史蹟となつたのであると徳常院の縁起書に記されている。

○宝安寺(曹洞宗) 万年町定林山と号す。明応元年(一四九二)僧模庵宗範建開基宝安香積居士、中興僧仁興隣宅、釈迦を本尊とす天正十四年(一五八六)七月江湖会の時北条氏制札を出す。今に蔵せり。(曰禁之貴賤、横合非分狼藉等。

堅令停止了。若違犯之輩有之者。速可被逐披露旨。被仰出者也。天正十四年(一五八六)丙戌七月十三日。宝安寺江雲奉之虎朱印)又十八年二月の法度書あり。其文に新地たるの由記載す。曰法度。新地の為この間、寺内并門前屋敷十五間、諸役不可有之事。竹木草花不可剪取止事。右三ヶ条、至于違犯之輩者。可有披露。可処敵科旨被仰出者也仍如件天正十八年庚寅二月十日宝安寺宗悦奉之。按ずるに此頃当所に転地せしなるべし。

倉光明寺末 往時浄土宗の関東総本山鎌倉光明寺第二十一世然蓮社貞譽上人賜紫良記大和尚(天正二年(一五二四)四月三日寂)当山新光明寺の開山上人となり、後北条時代の頃に当地に弁財天を安置する山上に禅僧東海上人が来住して小庵を設けて東海慈禪寺を建立したが東海上人が江戸に移り従つて寺も廃蹟となつた。

建し寺門の興隆に大いに貢献す。第十一世龜蓮社称誉上人真阿担量大和尚は地藏堂を建立す地藏像は現今当寺に存す。 又信州浄土宗の大本山善光寺如来前の心火を統来して常燈と成し永劫不断灯にする事を念願せるものなり明治三十八年に現在隣地に刑務所の設立にあたり約四千坪が法務省に買収れる当山第二十六世蓮社靈譽上人真阿求道賢瑞老和尚は大正九年は近江の国岩坂より此の地に來留す大正十二年(一九二二)九月一日関東大震災にて本堂庫裡並に諸堂全潰したるも克く苦難を排しこれが再建に努めて完成す。その後第二次世界大戦時弾丸列車鉄道が計画され庫裡は強制とりこわしとなる。

墓(日本最後の仇討) 一、宝物 本尊阿弥陀如来(大仏師運應蘇生の作) 地藏菩薩 加羅陀山地蔵尊 慈母弁財天像(約四百年前小田原仏師清七作) 脇侍二尊仏(恵心僧都作) 当山開山賜紫良紀上人 慈母弁財天記 当山現存の弁財天は今から約四五十年前永祿年間小田原住大仏師清七の謹作についてその来歴は不明なるも土地の古老の言によれば昔谷津山、小金の台地は竹の花、広小路大門まで延びており当時新光明寺の境内であった、今の少年院往時の山の中腹に池があつて天然の清水がたたえられその中の島に弁財天が祭られてあつたとのこと。台地南側下は海で、向いの城山(現在小田原駅裏山)との間は入江であつて現在でも七メートル下(地下)には青色の砂があつてその砂浜より台地に登る。石段も現在地中に埋れて残る。由来を偲ぶに、海に面した此の土地の人々はしばしば台風にみまわれて親は子を、子は親を失ない、家屋、田畑の一切の消失の危難に常に脅かされたため幾多の災害

により尊い人命を奪われた人々の霊位をなぐさめると共に海神の怒りを鎮めるべく弁財天をこの台地に祭りしものと思われる。 現在それ等の要所には(市中)弁財天が祭られてあり、時の城主は築城にあたり特に水利に重点をおかれしと伝えられている。 ときに幾多の変せんにより今日の東海道新幹線の起りにより境内に安置する弁財天も移転の余儀なきに至る時に総代深瀬林八氏は古くより子弟の教育に熱心で弁財天に祈願し、これが為移転に深く心を痛め浄財を傾注して名工、柳下栄太郎棟梁に弁天堂再建を依頼するに棟梁精魂を傾け新堂宇建立に誠を尽す、並に内田久枝氏は大画伯滝川洗風先生に弁財天像の彩色を依頼し当山境内堂宇に祭る。 以上新光明寺縁起、由来のしおりより

○大聖院(古義真言宗) 扇町 縁起のしおりがないので「相模風土記稿」に次の様に記されている。 大聖院明王山発光寺と号す。古義真言宗、小田原大工町蓮上院末、天文七年(一五三八)垣英起立す。本尊弥陀。 不動堂 荒沢不動と号す由来詳かならず。